

## ロドルフ・テプフェル『アルプス・ジグザグ徒歩旅行』

Rodolphe Töpffer: *Voyage autour du Mont-Blanc : nouveaux voyages en zigzag*

・解 説・

加太宏邦



本書は、テプフェルと一九人の生徒たちが夏休みを利用して、アルプスを二十四日間にわたって徒歩で巡り歩いた今から一五〇年前の旅の記録である。

一行は、あるときは炎天下の道を、また、ある時は凍えるほど寒い峠を、雨にけぶる谷筋を、放牧場を、町を、村を経巡って旅をしているが、著者は、目の前に展開する風景はもとより、しばしば起こる珍事や、行き交う旅人の様子や、旅籠の食事や、山の祭や、村芝居や、地元の人々の生活振り、だれかれと交わした会話などを逐一、饒舌な文体で記している。しかもそこに、いつも辛辣な批判や軽妙な見解を挟むことを忘れない。

そういう旅の記録と澁刺としたうんちくを読む興味に加えて、アルプスを歩いたことのある読者なら、山や氷河や自然の景観の描写のいくつかには同感をもって頷かれたのではないだろうか。シャモニーやツェルマット、インターラーケンなどは、とくに今日の日本人にもお馴染みの観光地である。また、これから歩いてみたいと思われる読者には、本書は、一風変わった新鮮で刺激的なガイドとなるであろう。

\* \*

本書は、そういう内容に加えて、歴史的にみると、徒歩旅行としては最後の時代のもので、同時に、観光旅行としてみると、ヨーロッパ大陸ではほぼ黎明期に属する旅であって、この二つが微妙に接点を持った時代の貴重な旅の記録でもある。

彼らが旅をした一八四二年(天保一三年)というと、鉄道が実験的に、イギリスやフランスで始まっていた。スイスでも一八四七年に営業路線ができる。バーデン= チューリヒ間の二十三キロが、スイスの国内鉄道の始まりである。したがって、この数年前では、徒歩旅行は旅をするためのほぼ必然的な形態だったとはいえ、もう消えつつあったのだ。もちろん、徒歩旅行自体は、古今東西、とくに珍しいことではない。しかし、テプフェルは、平地では、船や馬車をときに利用するとしても、基本的には徒歩旅行の積極的な意義を強く主張し、実践している。そのため、たとえば、その快感だけでなく、苦痛をも含めての足をつかうことの多面的な意義や、歩行と思索の関係、視界の違いからくる景観の質の違いとか、寒冷、炎暑、風雨あるいは空腹、汗、渇き、高所恐怖などが具体的な体験に則して、じつに細かく観察されている。さらに、飲物、食事、靴、杖、服装などについても考察がめぐらされている。その意味で、本書は、今日の大方の観光旅行者が忘れてしまった、「肉体」としての旅人をもういちど考えさせてくれる貴重な証言に満ちている、と言える。

もう一つ、この旅行で注目すべきことは、古代から人類が行ってきた様々な旅(巡礼、通商、征服などの有目的移動)とは根本的に性格の異なる新しい旅の形態、すなわち観光旅行が行われているということである。テプフェルとその生徒たちは、まだその概念が未熟であった「観光旅行」を、きわめて自覚的に、そして積極的に実施している。

じつは、観光という概念はそれほど古いものではない。たとえば、〈観光〉tourisme(この語は英語から発生するが)というフランス語の初出は、辞書などによると、本書の旅の一年前、一八四一年であって、もちろん、一般化するのには、さきに触れた、鉄道の急速な発達と関係して、さらに十年か二十年先のことになる。ついでに言うと、観光の概念を形容詞としてもちいる〈観光的、あるいは観光にかんする〉という *touristique* という語は、じつに、このテプフェルの創作語だった

<sup>1)</sup> 当然ながら、現代の徒歩旅行者には、中野融『ヨーロッパ・アルプスハイキング案内』(山と溪谷社)とか『スイスの旅』(エアリアガイド・昭文社)などで情報を補われたらよいかもしれない。

のだ。ちなみに、有名なドイツのガイドブック、“ベデカー”の *Die Schweiz* (「スイス」) が出版されたのは一八四四年である。

本書のなかにしばしば登場するイギリス人の観光者の挙動や、インターレーケン(Interlaken)の描写は、まさに観光の曙をなまなましく伝えている。しかし、一般には何を観光の対象とするのか。どうやって旅をするのか(コースの採り方、食事、宿、距離、天候、距離、荷物などの点検)という基本が、まだ旅行者の手に委ねられていた時代だったのだ。今日の旅行者のように、すでに制度化された観光という行為をなぞるのでなく、テプフェルの旅には、行く先を決定し、実地に見聞した上で、その行為自体が観光として成立するかどうかという問いかけがあった。

例えば、エヴォレーヌ村である。テプフェル一行は、当時、道も定かでなく、もちろん宿もないこの村へ「うわさ」をたよりに行ってみる。そして、その行程で、ここの景観や人間はどの点で興味深いのか、などという鋭い意識を働かせる。

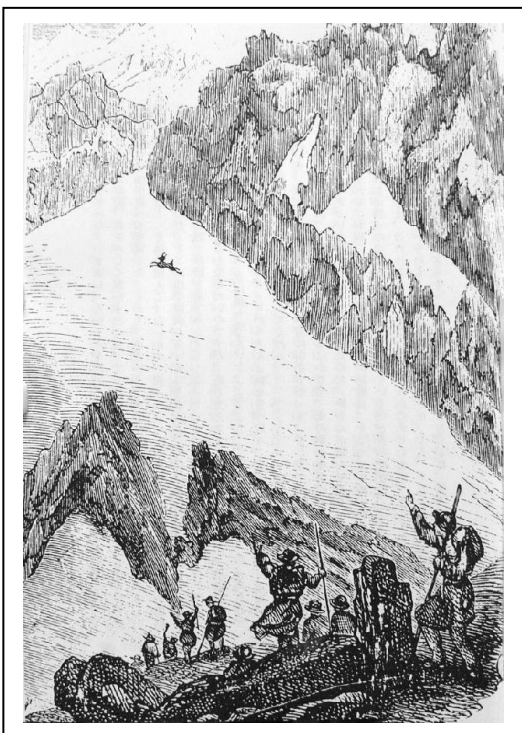
また、本書で何度か論じられる風景論や風景画論の視点は、景色というものが先験的には存在しないということ、いわば「発見」されるべきものだということをよく分かせてくれる。これも、じつは、今日の観光旅行で、見失われてしまっていることであり、重大な示唆を含んでいるのである。たとえば、テプフェルは、マッターホルンになぜ人は感心するのか、長々と考察する。現代の観光者が出来合いの名所としてしか見なくなった、いわば隠蔽されてしまった風景を、考え直させてくれる視点を提供してくれるのである。

この点で、やや時代は後(一八六〇～六五年)になるが、おなじくアルプスの名文を残したウインパーの『アルプス登攀記』と比べてみるとおもしろい。ウインパーは、いわば山を風景として見た形跡がほとんどないのである。処女峰征服のマニアという色彩が濃い。すなわち、観光とか風景発見の視点が欠落しているのだ。こちらは、観光とは別の、アルピニズムの系譜を形成していく。

こういうことを、考え合わせるとき、この『アルプス・ジグザグ徒歩旅行』がいかに先駆的でしかも凡百の旅行記から異色であるかが理解されるであろう。

\* \* \*

著者のロドルフ・テプフェルは一七九九年一月三十一日、スイスのジュネーヴに生まれた。ドイツ出身の父ヴォルフガング＝アードムは当時、名の知られた画家であり、ジュネーヴの美術学校の教師でもあった。そこで、ロドルフ自身も、絵を志して、パリへ修行に出かけるが、視力の問題(強い光に弱く、晩年には視界に斑点が揺れ動いたという)で絵の道を断念し、文学を学んで一八二〇年帰国する。しばらく、文学の勉強を続けたあと、生活の道を立てるため、一八二二年、寄宿学校の助教師として就職をし、一八二三年、アヌ＝フランソワーズ・ムリエ、愛称キティ(この徒歩旅行にも参加)と結婚。妻の持参金で、翌年、新しい寄宿学校(全寮制の学校)を開校しその校長となった。



寄宿学校には、ヨーロッパはもとよりロシア、中近東あたりからも学生が集まった。今日の日本の学制でいうと中・高校あたりの年齢の子供たちである。彼は、当初、ギリシャ語などを教えたが、すぐに学校経営に専念しなければならなくなった。その代わり、生徒たちを連れて、一八二四年以来ほとんど毎年、春、夏、秋の休暇を利用して徒歩旅行を行ったのである。行く先は、スイス国内、フランス・アルプス地帯、北イタリアなど、ジュネーヴから短くて四、五日、長くて一カ月ほどの旅で、いつも数人から二十名程度の生徒を引き連れて行った。この徒歩旅行をテプフェルは〈ジグザグ旅行〉voyages en zigzag と名付けた。「あっちこっち旅行」というわけだ。多少ユーモラスに自嘲が含まれてはいるが、一方、目的地へ無駄なく行く〈有目的移動〉とは異なる、という主張でもあった。

生涯、約三十回このような旅を実施し、その大方については紀行文と画才を生かしたスケッチを残している。本書に載せた挿絵も彼の手になるものである。

本書は、そういう徒歩旅行のうちの最後のもので、彼の今までの旅の集大成でもあり、もっとも内容の充実した記録文だと言われている。

彼は、寄宿学校の経営にあたるほか、ジュネーヴ・アカデミー(ジュネーヴ大学の前身)の文学部教師に任命され修辞学と文芸論を担当し、また創作にも手を染め、文筆家としても名が知られるようになっていった。

しかし、その多彩な活躍のうち、彼の才能がもっとも発揮されたのは、おそらく、この一連の旅行記と、もう一つ、「劇画」であろう。風刺画としての漫画は、同時代人のフランスのドーミエの諸作品を始めとして、ヨーロッパですでに存在していたが、連続のコマで綴るストーリー漫画の考案者は、あまり知られていないが、テプフェルをもって嚆矢とする。

晩年のゲーテを嘆賞せしめたのは、その劇画と旅行記であった。このドイツの大文豪は、残念ながら、本書の出版時にはもう亡くなっていたが、生涯四十回の旅をし、そのうち三回はアルプス巡りをしたという旅行好きのゲーテは、テプフェルと共通の友人フレデリック・ソレを介してテプフェルを褒め称える言葉をいくども述べている。これはテプフェルの終生の励みとなったという。

本紀行文の終章で、彼は、自分の目の病気から、もしかして、この旅が最後のものになるのではないかと、という懸念を表明しているが、残念ながら、その予感にあたってしまった。この旅から戻って、一週間後、友人に「僕の目は年々悪化しています。旅に出てそれがよく分かりました」(九月二十日、ド・ラ・リーヴ宛)と書いている。

眼病だけでなく、体調も崩して、本書にも出てくるラヴェ村などの温泉治療に出かけるが、そのかきもむなく、人生と徒歩旅行の良き伴侶だった妻の手に抱かれて、ジュネーヴで一八四六年六月八日亡くなる。四七歳の若さであった。

テプフェルに早くから注目していたフランスの文芸批評家サント＝ブーヴは、その死に際して、早速、六月十三日付け(デバ)紙上に追悼文を寄せ、後に、(モントゥール)紙一八五三年八月一六日号で、『アルプス徒歩旅行』出版に寄せて、「風景画家としてのテプフェル」という評論も著した。

テプフェルの著書は、本書も含めて、死後に出版されたものが多いが、小説作品としても、『叔父の書齋』*La Bibliotheque de mon oncle* や『長老派の館』*Le Presbytère* など約二十篇あり、また劇画作品に『ジャボ氏物語』*Histoire de M. Jabot* や『フェステュス先生』*Le Docteur Festus* など七篇、また旅行記は二七篇、ジュネーヴ州の政治に関する評論など多数ある。

\* \* \*

テプフェルが、この最後の徒歩旅行を終えたのが一八四二年。今年(邦訳)はちょうど一五〇年目にあたる<sup>2)</sup>。

時代がたって、景観はどう変わったのだろうか。たとえば、この旅行記では秘境として扱われているツェルマット谷(マッター谷)には、その後、一八九〇年に鉄道が敷設され、急速に観光的に開けた。たえず氾濫し、畑を浸食し、道路を破壊してしまうあのローヌ河は、その後、治水工事すすみ、比較的安全な河になっている<sup>3)</sup>。あるいは、グラン・サン＝ベルナル峠からマルティニ町に至る趣のある古道は、今はE21号線という国際道路になってしまった。テプフェルの憂慮したとおりのことが実現してしまったのである。ツェルマットで、時間的制約で頭頂を断念したリフェル山へは、今なら登山電車で、さらに高いゴルナーグラートまで登れる。また、あまりにも陰険なため途中で引き返したシュナレット岳は、今日ではリフトで片道二十分の道のりになってしまった。

もちろん、氷河がやや後退したしたことなどを除けば、山々の姿は今も昔も変わらない。それから、たとえば、エヴォレーヌ村のあるエラン谷は、鉄道が敷かれなかったおかげ(?)で、今もかなり昔ながらの姿を止めている。ウーゼーニュ村の奇岩柱は今も見られる。昔ながら、といえ、シオンの町の「一五〇五年建築の家」は今も、中を見学できるし、トゥーン湖畔の宿「ベルヴュー亭」も今も営業をしている。マイリンゲン町のホテル「ソヴァージュ館」なども一八八一年にベルエポック様式に建て替えられたがとにかく現存している。

時代の変化はこの旅行の中でもすでに記録されている。マルティニの町の宿のけたたましい自動配膳器械や製材所はユーモアたっぷりに皮肉られている。産業革命期の時代の波を敏感にとらえ、テプフェルはマヤン郷の仙境、森林開発に揺れる村人の気持ち、あるいは、村落共同体と都市の比較など、さまざまな問題を好奇心いっぱいのもなざしで観察している。ここでは、詳しくふれるゆとりがないが、こういう場面でのテプフェルの立場は、いつも「自然派」であり、その主張の背景にあるのは、明らかに、同郷人ジャン＝ジャック・ルソーの思想である。

\* \* \*

<sup>2)</sup> 邦訳の年、1992年。

<sup>3)</sup> このように書いたが、この翻訳書を上梓して7か月後に、ローヌ河は半世紀ぶりの大洪水を起こした。ツェルマット谷への入り口にあるブリーグの町を、濁流が襲い、駅舎や町の中心部は数メートルの土砂に埋まるという大惨事となった(2016年に訪れたときは、当然ながら、町は復旧していたが、駅舎をはじめとして、町の様相は昔どおりではなかった)。

邦訳の底本には Rodolphe Töpffer: *Voyage autour du Mont-Blanc: nouveaux voyages en zigzag*, Société de la Feuille d'Avis (Lausanne, 1970) を使用した。初版はテプフェル死後 7 年目の 1853 年に出版された。テキストの異同確認のために、Fayard 版 (Paris, 1979) も参看した。いく箇所か、紀行の本筋から著しく逸脱した部分を抄訳または省略したところがある。たとえば、シュタルデン村の芝居を語る部分に挿入されている配役の一覧表などである。ご諒承願いたい。

山の名前や地名の綴りの不正確さ(主として表記が確定していなかった時代的制約によるが)などは、現行地図と照合してあらため、そのむね注記をつけた。また、明らかな勘違いと思われる部分は、ことわりなく訂正して訳出した。たとえば、東西や左右の間違いなどである。山岳用語は、当時、まだそれほど確定していなかったことに鑑み、かならずしも、現行の慣用には従わなかった。たとえば、col は今日「コル」というのが普通であるようだが、本書では「峠」とか「鞍部」とか、比較的日常的な用語で訳出した。

周知の通り、スイスでは四つの言語が使用され、この旅行記でいうと、シエールの町から先、フリブール町まではドイツ語圏を旅していることになる。しかし、原文では、その地名もフランス語表記されているため、本書では、現地発音を尊重し、ドイツ語名にもどした。たとえば、Cervin は「マッターホルン」とするなどである。

\*            \*

この翻訳に際して、M・C・ドゥヴァラ、G・ブラン、H・リシャール、Y・イヅカなど多くのスイス人知己のお世話になった。また、訳者の手に余る部分については気鋭の仏文研究者の鹿島晃一、清岡智比古の両氏のご助力をあおいだ。さらに地図イラスト制作には畏友市川寛志デザイナーの手をわずらわした。ここに厚くお礼を申し上げておきたい。

一九九二年十月十日

(校閲 2017.7.01)